



Puzzzle文集 6

目次

バット・フォー・グッド	1
二足歩行	3
世界はどうしてこんなにも	4
パレードしようよ	5
女のいない夜	7
炭水化物がうまくてしかたがない	10
男は黙って	12
とろろ汁でも飲んでれば	14
馬ゾンビ鹿ゾンビ	15
あんパン 20 個とか	18
おじさんこちら	19
酔ひもせず、ん	22
バランスボーイ	24
押し入れの中へ	30
ネックを掴んで振り被る	32
さようなら。タコ	33
踊る女	35
トイレットペーパー使いきりのお願い	37
パーマネント盆ヴァケーション	38
ゼロにはならない	40
奥付	
奥付	46

バット・フォー・グッド

午後三時三〇分、俺はトイザらスにてグリーンのカラバットを購入。塩ビの野球ボールまで付けてしまったのは、餓鬼共と草野球を興じたい訳ではない。気の弱さの表れだ。気が弱いという言い方が適当だろうか。幼年期から抜けきれない自意識への敗北。いずれにしても俺は必要のない塩ビのボールまで手にしてしまう。こいつは家に帰ったら、千枚通しでパンクさせたほうがいい。その後、果物ナイフでズタズタに刻んでやろう。そう思うと、やはり真っ赤なボールが相応しい。緑のバットに赤のボール。クリスマスかってえの。メリー。

「袋はいいです」

だって、カラバットとボールだよ。どう袋に入れていいか迷うだろう。どうせカラバットはすぐに入り用なんだ。ボールなんてポケットに突っ込んでおけばいい。

俺は店を後にして、ショーウィンドウに自身を映す。寒い季節でもヒラヒラのコートはご免なんだ。足下はローカットのキャンバススニーカー、ボトムは501、トップはアランスエーター。二〇代の頃じゃあり得ない選択だった。でも、今となればこれがいい。フィッシャーマンの文化が編まれた厚手のスエーター。漁師の血なんぞ一滴も流れちゃいない。でも、いいんだ。生まれるべくして生まれた、その背景がきちんとしたものを身につけていると安心するだろう。ジーンズだってそうだ。THE ORIGIN 501だよ。

そして、俺は501のバックポケットに真っ赤な塩ビのボールをねじ込む。続いて、カラバットのグリップを握って軽く地面を突いた。如何にも軽々しいプラスチックな音が鳴り響き、俺は笑いを堪える。

さて、何処へ行こうか。なるべく浮かれた人が集まるビルデングがいいだろう。気位の高い輩の集まった百貨店よりは、最近流行りのショッピングモールなんかがいい。小さな頃にはカラバットを振り回して三角ベースなんかに夢中になっていた、中流の輩でいいんだ。

電車で二駅ほど行けば、そんなところがあったはずだ。俺はカラバットを片手に地下鉄へと向かった。ホームに立ち、再び軽く地面を突く。ピカピカにポリッシャーがかけられたホームは、アスファルトとはまた異なる、多少澄んだ音を響かせた。俺は笑みをこぼす。

金属バットではない、この如何にも頼りない音がとてもいいと思うんだ。やがて、重厚な音を響かせながら地下鉄がホームに入ってきた。安全柵とともに列車の扉が開く。俺はそいつに乗り込むとすぐに反転して、ドアのすぐ横にカラバットを立て掛けた。そして、スマートフォンを取り出し、その姿をワンショットだけ撮影する。画面に映し出

されたそれに俺はいたく満足だ。

「そうだ」

不意に思いつき、思わず口につく。これから向かうショッピングモールに東急ハンズがあったはずだ。千枚通しを買うことにしよう。それがいい。

千枚通しを購入したなら、スターバックスコーヒーで抹茶ティーラテを飲みながら、そいつを真っ赤な塩ビのボールに突き立てようか。ゆっくりと差し込んでいっても Bang!! と音を立てて破裂することはないだろう。みんなショッピングの小休止を楽しんでいるところだ。何をしたら誰も気には止めないだろう。それがいい。

俺は駅を降りると、再びバットでホームを突いて、音色を楽しむ。そして、浮かれた人々の流れに身を任せながらショッピングモールへと進んでいった。

やけに人が多いと思えば、バーゲンの季節なんだね。俺は10歩進む度にカラーバットで1度床を突く。次第にグリップを握る手にも力がこもり、時折、人が振り返る。俺は目を合わせることはせず口元にだけ笑みを浮かべる。

俺は至って冷静なんだ。

どれくらい冷静かと言えば、先ほどの千枚通しのことだけど、スターバックスコーヒーで抹茶ティーラテを飲みながら塩ビのボールを突き刺すなんて、そんなこと実際にはしないんだ。

ここには俺なりの線引きがあって、片足が入っていれば一步だけ飛び出してもいいルール。

だから、いずれエスカレートして金属バットで無作為にヒトを痛めつけるなんてことはない。

このカラーバットにしたって、人混みで振り回すなんて迷惑なことは絶対にしない。たとえ振り回したとしても、それはミュージカルのワンシーンで気を良くした紳士がスネークウッドの大曲りステッキを振り回すような、あんな感じでありたい。

結局、真っ赤な塩ビのボールはキッズたちの遊具施設に放り込んでやった。そして、スターバックスコーヒーには寄ってから帰る。俺は甘党なんだ。抹茶ティーラテに加えて、莫迦みたいに甘いピーナッツバタードーナツを注文する。

そいつを平らげたら、最近弛みがちな腹へのささやかな抵抗。2駅分なら歩いて帰れるだろう。ショッピングモールを後にすればもう日暮れだ。行き交う車の音に紛れて俺はバットを振るう。ここなら多少派手にやっても構わない。俺が知る数少ないミュージカルの中から「いかれ帽子屋」の歌を口ずさむ。そして、大曲りステッキさながら陽気に振り回し、地面を突き、ガードレールを叩き、蹴り上げもする。やがて気が済んだら、そこいらへバットを捨ててしまう。必要になった時、また新たに買えばいい。

二足歩行

階段を上る目の前の女、ヒョウ柄のパンプスが片方脱げ落ちた。黒のロングコートをなびかせた男、自動改札を抜けようとする俺の前に割り込んだ。列車とホームの間には思いがけないほど広い隙間。

俺は考える。そして、飛び越える。

私上最速のブレインと強靱な両足で、俺は歩みは止めない。

通勤列車を降りれば、俺の前を同僚の彼奴が歩いていた。ブレインは歩みの速度を緩める。彼奴は携帯電話を握ったまま何やら大声で話していた。

「本当にい？」

彼奴は大げさなアクションで立ち止まる。俺はビクリと肩を揺らす。それでも歩みを止めない。一気に追い抜いてしまおうかと思ったところ、彼奴は笑い声をあげながら再び歩きはじめた。

「驚かせないでくださいよお」

ブレインは咄嗟に歩みの抑制シグナルを放出。

目の前にはコンビニエンスストア。嗚呼、コンビニエンス。俺は大して飲みたくもない缶コーヒーを買い求めるという体で、コンビニに立ち寄ることにした。

「では、よろしくお願いしますう」

彼奴は電話を切ると、揉み手をしながらコンビニへ向かう。俺は直角に方向転換、左足を跨いで右足をあり得ない方向へと伸ばす。

「ふぬグッ」

捻った腰の鈍痛に耐えかね珍妙な声が漏れた。そして、彼奴が振り返る。

「おはよっ」

頼んだ覚えのない爽快な笑顔とともに、スるッと右手を挙げた。俺なんか右足と左足が明後日のほうに向いたまま。尻を突き出した体勢で左手を挙げる。

「おっはよ」

彼奴は模範的な笑顔の上で眉毛を器用に捻る。俺のブレインは凝固点を超えて溶解しはじめた。今度は右足を跨いで左足をあり得ない方向へと伸ばしてみる。続いて尻を突きだして右手を挙げた。

「おっはよ」

それに続く言葉を俺は知っている。彼奴の言葉を待っている。なのに彼奴は何も言うことなく、コンビニエンスストアへ消えていった。

やむを得ず自問。

「何やってんの？」

そして、自答。
「ウォーキン、ウォーキン」
俺は考える。そして、飛び越える。
私上最速のブレインと強靱な両足で、俺は歩みは止めない。

世界はどうしてこんなにも

苦いのは毒だから、辛いのは痛めるから、酸っぱいなんて腐っているからだろう。
奥歯がうずき出した。
世界一甘いのはミルクィだ。甘くって。優しくって。温かくって。誰もが認めるママ
ンの味。そんな、甘い枕に抱きついた奥歯が疼き出すのなら仕方無い。
でも、違う。
苦い苦い臓物に漬け込んだ軟体動物門頭足綱十腕形目を食す。
「甘いっすねえ」
そいつを冷酒で流し込む。
本当に甘いのか？
ゆっくり吸い込んだ冷気を、痛んだ奥歯へ送る。
すりおろされる過程で細胞中の酵素とシニグリンが反応することにより生成されるア
リルイソチオシアネートの辛い辛い殺菌力に涙を流しながら、生魚を食す。
「甘いっすねえ」
そいつを焼酎で流し込む。
本当に甘いのか？
二五度のアルコールを、痛んだ奥歯へ送る。
唐辛子や魚醤や大蒜に漬け込んで乳酸発酵させた、辛い酸っぱい漬け物を食す。
「甘いっすねえ」
そいつを麦酒で流し込む。
本当に甘いのか？
炭酸ガスの刺激を、痛んだ奥歯へ送る。
甘いわけがないだろう。感覚が腐ってんだ。痛い痛い辛い辛いが好みならば奥歯が
お手頃。そいつを蝕む雑菌が歯槽までもを侵蝕し、陥没したクレーターを覗き込めば、い
ずれ脳味噌だって舐めるよ。
「それまでにお金は貯めておきな」
自身の骨髓細胞を培養骨に分化させれば、陥没した歯槽だって治るというよ。保険適

用外だって言うから、その時のために、お金だけは貯めておきな。

シャーレの上で培養骨がコロコロと毬藻のように膨らんだ。そいつを陥没した歯槽に埋めていく。

「それ、一口だけ食わせてくれないか？」

チョロっと醬油を垂らして、口の中に放り込んでくれればいい。

「サクサクミルキーって知ってる？」

その名の通り、サクサクッと嚼るミルキーだよ。

培養骨の歯応えといったら、丁度そんな具合なんじゃないかな。無菌状態で培養された自家細胞だ。すりおろされる過程で細胞中の酵素とシニグリンが反応することにより生成されるアリルイソチオシアネートの辛い辛い殺菌力に涙を流す必要もないだろう。

ついでに、肝細胞もよろしく。

厚生労働省からお達しが出たろう。平成 24 年 7 月より、食品衛生法に基づいて、牛レバーを生食用として販売、提供することは禁止だ。

無菌状態で自家肝細胞を培養した肝臓ならば文句は言わせない。腸管出血性大腸菌の疑いなど皆無だろう。あとは甘い塩を溶かした胡麻油を添えてもらえれば結構だ。

再び奥歯がうずき出した。

世界一甘いのはミルキーだ。甘くって。優しくって。温かくって。誰もが認めるママンの味。

でも、違う。

酒の肴に自家細胞。培養骨に培養肝。苦味、辛味は無かろうと、ママンの味にはほど遠い。

パレードしようよ

見るからに頑丈な脚付きグラスに甘い安いワインを注いで、女のグラスを脚で蹴り上げる。本来ワイングラスをがち合わせるのはマナー違反と聴くが、『落としても割れません』を売りにしたようなぶ厚いなグラスだ。ビールジョッキのようにかち合わせても問題はないだろう。

「もうすぐ誕生日ね」

女は切ったばかりの毛先に目を寄せながら呟いた。

「パレードしなくちゃ」

お互いの誕生日が近づくと、毎度こんな会話を繰り返している。会話というより合図

みたいなもんだ。

「パレードしなくちゃ」＝「俺はそこそこ機嫌がいい」

女が漕ぐ電動アシスト自転車の上にリアカーをくくりつけてさ、アルミホイルの王冠をかぶった俺がさ、リアカーに乗って手を振るのよ。思慮の浅い選挙運動みたいでいいじゃない。

そんなパレードしようよ。

日曜の夜となれば、口数も少ない。

明日は参加することに意義がある全社会議だ。飽きがきた俺は眠気に負けないよう恒例の脳内会議を展開する。明日の議題は『女子社員のビジネスカジュアルの許容範囲について』と決めている。事前に女にも意見も聴いてみることにした。

「ペコちゃんがプリントされてなきやいいのよ」

いくら酒に強くはないとはいえ、まだ一杯目だぞ。

「ポコちゃんは？」

俺は言いかけて飲み込む。発言のセンスには気をつけていたいと思う。女を落胆させないためのマナーとしてね。気障なこと言うようだけれど、相手が女房なんだからいいだろう。

女房だって。あはは。

人前で口にすることも無い。何だか古風じゃない。でも、あえて言いたいね。直属の課長なんかにさ。

「家の女房がねえ」

ちょっと部長クラス。

あと五年で不惑とは信じがたい。

会話は続かず、俺たちはグラスを傾けながらぼんやりと報道番組を眺めた。あの広報部長は立派だなあ。ウチの会社で言うとなら誰だろう。そもそもウチに広報部なんて無いよなあ。

深酒はしないように。女の顔が桜色を呈したところで、グラスに残ったワインを飲み干す。

女は頬杖ついてアンニユイ。俺はそれを見届け、和室に二組の布団を敷いた。

アンニユイ【ennui フランス】心が晴れず、けだるいこと。倦怠けんたい。
(広辞苑第六版 DVD-ROM 版)

俺のアンニユイには、語感からくる勝手な解釈がプラスされている。

女は布団を見ると途端に目を輝かせた。アンニユイタイムは早々に終了。そして、鼻息を一つ。

「髪を短くしたら、でんぐり返ししたくなったわ」

女は布団の上でクルリと回ってボブを揺らす。

「森昌子かよ」

「森光子でしょ」

女は再びダイニングへ戻り、急須の出し殻に湯を足した。俺は布団の上で、スマート

フォンをいじりながら、お気に入りのロックミュージシャン達のどうでもいい眩きを流し読みする。

「お茶飲まないと、明日しんどいわよ」

「京ことばだね」

俺は要らぬ知識をひけらかしながら、湯飲みを受け取る。

「熱っちい」

熱くて口に運ぶこともできず、畳に置いて、手先をブルブル振るった。

「熱くないの？ 手の皮厚いなあ」

「面の皮は厚いのにな」

「面に皮が集まっちゃったんだよ」

「質量保存の法則？」

俺は鼻で笑って、湯飲みの縁を指先で摘んだ。

俺たちはいい具合だ。

機は熟した。

今年こそは本気でパレードをしようと、思考しはじめる。

女のいない夜

「ファンタグレープって、久しく飲んでないよなあ」

ブックオフで一〇五円の文庫本を購入して家に戻ると、すっかり外出仕様に変貌を遂げた女が出迎えた。

「夕飯、本当に任せちゃっていいの？」

ここ数日、何度も繰り返される質問に嫌気がさす。

「大丈夫だって言ってんだろ。あるモンでなんとでもするから、気にせず吞んでこい」

できないんじゃない。やらないだけだ。

学生時分は『とんでん』でバイトしていたんだ。うどんを茹でるだけじゃないぞ。天ぷらだって揚げられる。一八〇℃にキープされた岸边のあるフライヤーならね。

女は俺の手をとって、急いだ様子でキッチンに駆ける。おうちで走っちゃダメなんだよ。幼い息子が得意げに声をあげた。

「ゴメンゴメン」

女は冷蔵庫の前に立ち、あれこれ食材に指を差していく。俺はうどんと玉子の場所を再確認。小鰯のパックなんて見せられたところで扱う術がない。最後に、野菜室からスヌーピーがデザインされたタッパーウェアを取り出した。

「茹でたホウレン草もあるからね」

そいつは具合がいい。緑のモノを食わせておけば上等だ。

女は冷蔵庫の中身を一通り案内して、一定の安心感を得ると、玄関でブーツのジッパーをあげた。俺は息子と二人で女を見送り、ドアが閉まればロックをかけた。

俺は、はじめに慣れた手つきで息子を風呂に入れると、ブロックが散らばるリビングヘリリリースした。

そして、男一匹、台所に立つ。

女のいない夜。俺は昨晚のおでんの残り汁にうどんと玉子を落として、意気揚々。

「今日はパパの手料理だぞ」

彼奴も随分と話が通じるようになった。

「ランチョンマット敷いて、箸出しといてくんないか？」

一言伝えれば、彼奴はブロックを組み立てる手を止めて、食器戸棚へ向かう。口を尖らせて感心する反面、何だか気になる。随分と聞き分けがいいじゃないか。

彼奴は親父の言うことが絶対とでも思っているのではなかろうか。

鍋の火を止めてテーブルに目をやれば、女の分も含めた三枚のランチョンマットが敷かれていた。俺は口をへの字に結び、そのうち一枚を片づけた。

女のいない夜。俺は幼い息子を前に必要以上にハイテンション。

「いっただっきまあす」

僅かに残る不安と緊張が蜘蛛の糸のように煩く纏わりつく。そいつを拭い去るように声を張り上げる。大きく手を打って頭を垂れる。彼奴は俺の心持ちなんぞ露知らず、面白がって何度も手を打つ。俺は鼻を鳴らして、濃いめに拵えた焼酎の湯割りを一口含む。静かな夜にズルズル品のない音を響かせる。ひゅいと一息ついて息子を眺めれば、湯気立つ丼に顰めっ面を見せながら格闘中。小皿に取り分けてやったほうがいいのだろう。しかし、酒に手をつけてしまった俺は重い腰があがらない。

「おいしいか？」

顰めっ面のオウム返し。その真意は測りかねるが、おでんの汁に玉子と炭水化物だ。不味い要素はないだろう。格闘する我が子を眺めながら、うどんを啜り、汁を吸う。ほらどうだ。不味い要素など一つもない。

茹でたホウレン草もあるからね。

不意に女の言葉を思い出した。緑のモノを食わせておけば上等だ。

女のいない夜。俺は幼い息子の扱い方が少々荒い。

「おい、冷蔵庫のスノーピー持ってこい」

すぬうびい？ 彼奴は首を傾げて立ち上がる。俺は人差し指を伸ばして冷蔵庫へ導く。彼奴は冷蔵庫の扉に手を伸ばす。

「ちやうちやう。チルドお」

ちるど？

「あっ、じゃなくって、あれなんだ？ 野菜室か。引き出す。ちやうちやう。引き出し、ちやうってばよ」

俺は溜め息とともに立ち上がり、野菜室を引き出した。

「いいから、もう座れ」

彼奴の後頭部を指先で小突いて、タッパーウェアを取り出す。そして、ハウレン草を一摘み井に放り込んで、箸でうどんを掻き回した。これで多少は冷めたらう。

ハイチェアについた彼奴の顔を覗けば、眉を垂らして小さくなっていた。俺は口を口の字に開き、やる気のない鳥のように嗚呼と鳴く。テーブルを挟んで腰を下ろす。無理に口角を持ち上げる。

「怒ってないよ」

ってか、ごめん。

女のいない夜。俺は酷く自己嫌悪する。

腕を伸ばして電気ポットから湯飲みに湯を足す。残りわずかの『安心院蔵』を二度に分けるべきか熟考した後、口を尖らせて入れすぎた湯を啜る。

「熱っちい」

本当は大して熱くはないのだ。苦悶の表情を浮かべれば、案の定、彼奴は子猿のようにキャッキヤと笑う。その切り替えのはやさは見習うべきものがある。しかし、あれだね。他人の不幸は密の味。ヒトは生まれつき他人の不幸を笑いものにする質があるようだ。俺はタラタラとウドンを啜る彼奴を眺めながらヒトの本質を知った気になる。

五合瓶を傾けて、最後の一滴を振り落とす。あと一杯を惜しみながらチビチビやっていると、彼奴の様子がどうもおかしい。

「おいしいか？」

気のない声でオウム返し。その真意は、眠いんだろ。こんな俺と二人きりでも、眠りに襲われるのか。頭をグラグラさせはじめ、まったく健やかな体だね。

大して美味くもない井を、よくぞ半分も平らげてくれた。

「最後、一口」

俺はハウレン草を箸で摘んで、小さなチューリップのような口に押し込む。そして、目を閉じたまま口を動かす彼奴を抱え上げた。

抱かれた時の安定感。それだけは女より優れているだろう。

「パパがいるから絶対大丈夫」

女のいない夜。俺は幼い熱の固まりを胸に押しあてて、必要以上にハードボイルド。

片手にファンタグレープを握って、背中に不満を背負い込んだまま店内を闊歩していた。不意にブックオフで見かけた少年がフラッシュバックした。

男児たる者、ハードボイルドであれ。そう願う。

例えば、女とは一切口をきかないという思慮の浅いものであったり。例えば、いつでも笑顔を絶やさないなんて意地っ張りだったり。例えば、電車のシートは端でなければ座らないなんてこだわりだったり。

「固ゆでの卵」の意から転じて冷徹・非情の意？

輸入盤のCDしか買わないなんてヤツもいる。味噌汁は食後のデザートだってヤツもいた。ギターのテクニックよりジャンプの飛距離に悩むヤツもいる。

ハードボイルドとは、ちと違う。

彼奴と二人きりだからとるべきアティチュード。あと一〇年もすれば片手にファンタグレープを握って、背中に不満を背負い込む彼奴にとるべきアティチュード。俺は今こそとるべきアティチュードを模索中。

歯磨きをすること。出なくてもトイレに行くこと。靴下は脱ぐこと。床につく前のルール。

俺は寝息をたてる息子を抱えて洗面台に立つ。

さて、どうしたもんか。

鏡には背後の浴室が映る。

女のいない夜。俺が出て行ったらどうなるだろう。彼奴を浴槽に放り込んで、出て行ってしまったらどうなるのだろう。

おい女。早く帰ってこい。

そして、この阿呆な思考たちを止めてくれ。

炭水化物がうまくてしかたがない

チノパンは履かないと決めていた。あんなもん、無難を求めたオッサンのパンツだ。でも、一時期ロールアップが流行ったろ。あの時ばかりは、裏地に柄が入っているヤツだったらアリかなって思ったよ。そして、俺が購入したパンツの裏地には、「のびあがり」みたいなのがいっぱい描いてある。Googleで「柄」「勾玉」って調べたら、ペイズリーって出てきたよ。どうしたって水木先生が繊細な点描で描いた妖怪「のびあがり」が思い出される。白地に紺のペイズリーだ。夏っぽいだろう。陽が短くなり始めるとどうもロールアップする気になれない。結果、スリー・シーズンは只のチノパン。陽の目を見ない妖怪が無数に描かれたチノパン。そして、俺もオッサンの仲間入り。

昼飯は丸亀製麺の釜玉うどん。玉子は鉄板のタンパク源だね。そして、炭水化物が美味くて仕方がない。夜は極力控えるようにはしているが、焼酎の湯割りが進めば、キムチだけでは飽きたらず、結果、柿の種に手が伸びる。三幸より亀田。山葵とか塩胡椒とかでなくて、やっぱり定番のやつね。

「柿の種の山葵って美味くね？」

「美味いっすよね」

なあ課長、あれ嘘だから。

酒が入るとオーディオにCDを突っ込むのも億劫だ。歳をとったのも事実だが、進化に伴う不必要な応答機構の退化だよ。音楽ならば、パーソナルコンピューターに全て取り込んである。メディアプレイヤーをたちあげて「俺コメンド」と名の付いたをプレイリストをクリックすれば最高のナンバーが流れ出す。

幸福の蝶～旋～♪

酒と肴と湯飲みを持って卓袱台につけば、電気ポット、P Cマウス、T Vリモコン、全て手の届くところに揃っている。

人間椅子のナンバーに酔いしれながら、ケイヨーデイツーで螺旋について熱く語っていた彼奴を思い出す。

「この螺旋サイコーじゃね？」

「ね？ じ？」

学生の頃は無敵だった。実に気楽だった。

ロック不毛の八〇年代。日本には第二次バンドブームがやってきた。第一線に残るバンドは一握りであれど、珍物、奇物、色物は多い。

嗚呼。それにしても「俺コメンド」。そいつを見るたび虫酸が走る。毎日目にするものだけにどうかしたのが、どうにも気の利いたタイトルが浮かばない。一時はデフォルトの「マイ・フェイバリット」に戻すが、それはデフォルトの「マイ・フェイバリット」ではなく、俺が入力した「マイ・フェイバリット」なわけで、虫酸が助走しはじめる。結果、いつまで経っても「俺コメンド」。嗚呼。

奥田民生は聴かないようにしている。彼奴だけは聴かない。彼奴を聴きだしたら何でもありになってしまうだろう。ロックってのはさ、フォークってのはよ、無骨で格好の悪いものだろう。どうしても格好宜しくない奴らが、どうしても格好宜しくなりたいくて、声を張り上げたのがロックンロールだろう。マシマロは関係ない。

思い出し～て～も～その時は～手遅れ～♪

帰れない～嗚呼～永遠に～嗚呼～♪

そして、このナンバー。バンドブーム末期に現れた、時代錯誤のグラマラス。2013/2/10 06:04 スポーツ報知は、素晴らしいニュースをアップした。

誠に勝手ながら全文コピ&ペ。

ROLLY（49）率いるロックバンド「すかんち」が9日、東京・渋谷公会堂で30周年記念ツアーのファイナル公演を開催。2009年に階段から転落し、脳挫傷による右半身不随の重傷を負ったベースのShima-chang（しまちゃん＝本名・武内志磨、年齢非公表）が事故以来初めてで約6年ぶりにステージに上がった。車いすに乗り歌も披露し「なんか夢みたい。やったぜー！」と涙の復活を果たした。

この日のために用意したというドレスで決めたShima-changは、ナース姿のスタッフに車いすを押されながら登場。07年以来、約6年ぶりのステージ。約3000人の観客の手拍子に迎えられ「帰ってきました！ すみません...まだ生きてます」。恥ずかしそうに復帰の第一声を発すると、客席からは「お帰り！ Shima-chang！」の掛け声が飛び交った。

ステージでは、自身のボーカル曲「好き好きダーリン」「Sugar Sugar Baby」の2曲を披露。たどたどしいながらも、事故前と変わらないキュートな歌声に、客

席は大盛り上がりとなり「なんか夢みたいです。やったぜー！」と声を上げた。ラストのヒット曲「恋のマジックポーション」では再びコーラスで登場し、大号泣。ROLLYも涙をこらえながら「とにかく良かった！」と声を掛けた。

09年11月の事故で命を取り留めながらも重度の障害を負ったが、懸命のリハビリを続けてきた。ようやく迎えたこの日の復活にリハーサルでは号泣して歌えなくなるほどだったが、本番では「死んだと思ったら実は生きていたんです。みなさん長生きしましょうね」と冗談っぽく語るなど明るさいっぱい。普段は動かすのが難しい右手を振ってファンの声援に応えるなど、メンバー、スタッフも驚くほどのパフォーマンスを見せた。30周年にようやくメンバーがそろい、ROLLYは「ロックをやっていて、こんなにうれしかったことはない。どんな音楽でも音楽って本当にすばらしい」と語った。今後はベースを弾くことを目標にリハビリを続けていく予定で、Shimachanは「これからは全部パラダイス。楽しく楽しく生きていこうと思います!」。6月には再びコンサートも行う予定で強い意気込みを見せている。

「嗚呼、俺はまだ泣ける」

湯割りを呷る。柿の種を摘む。嗚呼、塩辛い炭水化物がうまくてしかたがない。

奥田民生、御免ね。

イージュ★ライダーは好きよ。

全部許してやる。

ロックンロールの名のもとに、

最後には、

全部全部許してやる。

男は黙って

漢二匹、黙々と緑道に行く。

大きなゴミ袋とトングを握って、世の中のゴミを拾う。空き缶、吸い殻、古新聞、古雑誌、その他諸々。それぞれの職を全うして捨てられていった諸々。

彼奴はトングで摘んだ口紅付きの吸い殻を眺めながら、毎度のように呷く。

「本当のゴミは、こいつを捨てていったヤツなんだ」

それはハウアーユー？とか、コモエスタウステ？などと同義語であると解釈している。俺は「だよな」とか、「まあな」とか、大抵はいい加減に応える。

そして、時には声を荒らげる。

「全く世の中ゴミ野郎ばかりだ！」

つまりそいつはムイビエン！

俺は思う。ゴミ野郎が吸い殻を捨てるところに出会したらどうする？ 俺ならば少しだけ大きな溜め息をついて、そいつをつまみ上げるだけだね。彼奴はどうだ？

おまえはどうだ？

聞いてみればいいことだが、きっと俺の望んでいない答えを出してくるだろう。できないことを言うんだよ。彼奴の考えていることぐらい聞かなくても分かる。彼奴は嫌らしい笑みを浮かべながら口紅のついた吸い殻をゴミ袋に放り込んだ。中坊だった頃のおまえを思い出すよ。校庭の隅で見つけた使用済みの水風船を、木の枝で拾い上げて振り回していた。それが避妊具であることを知ったのは卒業後だった。そして、何故あんなところに転がっていたのか、今になって我が母校を訝る。

拾う。拾う。黙々と拾う。それが俺の役割だから。誰に与えられたでもない。俺が決めた、俺の役割だ。ヒトの役に立ちたいと思うのは、先天的なものなもか、教育の賜物か、仕事に追われた日々による後遺症か。早期退職後にはじめた緑道散策は、いつしかゴミ拾いに変わっていた。

ヒトのためにしか生きられないのか。

なんてな。

所詮、俺が決めた腹八分程度の満足が得られる役割だ。ゴミ野郎の後始末をして、一本の缶ビールを空ける。そいつが何よりの楽しみなんだ。

三船の教えに従って『男は黙ってサッポロビール』といきたいところだが、まだまだ老い先短いとは言い難い。しばらく贅沢は控えておくべきだろう。で、麦とホップ。俺にもビールだ。

お決まりのコースを抜けると、その県道沿いには、なんでも酒やカクヤスが待っている。というより酒屋に向かって歩いているのだ。麦とホップ一缶一〇六円。カクヤスってくらいだから地域一番に安いのだろうと疑いなくプルタブを開ける。

漢二匹、鴨池の前で腰を下ろす。黒の缶とゴールドの缶を形式的にかち合わせて咽を鳴らす。二つの缶が並ぶ度に思う。ストローを差して同時に呑めばハーフアンドハーフだな。

彼奴は小石を拾い上げて池に放り込む。鴨たちが同心円上に広がる波紋から逃げるように水面を滑ると、フフンッと鼻を鳴らす。

俺は次こそ二本のストローを忍ばせてこようなどと阿呆なことを考え、フフンッと鼻を鳴らす。彼奴だって同じようなことを考えているに違いない。初老の漢二匹、缶ビールにストローを差してチューチュー吸い上げる。時折、二本のストローを口にくわえてハーフアンドハーフを嗜む。どうなんだ？

不意に視界に割り込んだ男が、最後の煙を吹き出して吸い殻を踏みつぶしていった。

「おいゴミ野郎！」

彼奴が声を張り上げ、俺は目を丸める。

できるじゃん。

途端に居心地の悪さを感じ、俺は考えはじめる。

そろそろ隠居でもはじめるか。

そして、俺は空き缶を池に放り込んだ。

とろろ汁でも飲んでれば

きっと宇宙人なのよ。

最近はそう思うようにしている。

男は今日もとろろ汁を拵えている。

食事の支度における「下ろす」作業はおおよそ男の役割でしょう。何もしない私の父だって、みぞれ鍋の時には丸々一本の大根を下ろしていたわ。

「山芋の無抵抗さには恐れ入るね」

男は目尻に皺を浮かべながら、下ろし終えた自然薯を下ろし金からすり鉢に移し替えた。

とろろ汁という食文化は、私がこの家に持ち込んだものみたい。男の実家でとろろ芋料理と言えば、専ら山かけ。マグロのぶつ切りにとろろ芋を被せて、青海苔をまぶし、醤油を垂らすアレね。生卵を混ぜる文化すらなかった。私がとろろ芋に生卵を混ぜたときの驚き様と言ったら。あの間の抜けた顔が忘れられない。

きっと宇宙人なのよ。

とろろ汁に魅せられた宇宙人。

「生卵の白身ってちょっと苦手なんだよね」

男は泡立つほどに生卵をかき混ぜ、時折、箸に引っかかる白身を持ち上げては千切る。すき焼きの時だってそうなの。泡立つほど掻き回した生卵で、すき焼きを食べる男の気が知れない。そんな卵で何が美味しいの？ そんなに白身が嫌いなら除けばいいじゃない。そう言ったら、MOTTA I N A I ときたわ。

きっと宇宙人なのよ。

ワンガリ・マータイに共感した宇宙人。

「胡麻搥りって、搥り鉢にベタベタくつつくから胡麻搥りって言うらしいよ」

男はそう言いながら、搥り粉末で自然薯をよりきめ細かく搥っていく。私は頭の上に疑問符を浮かべ、すぐにかき消す。そっちの胡麻搥りか。

「仕草的なものかと思ってなかった？」

男の問いかけに、曖昧に頷きながら鍋のふたを取る。確かにそうかもね。

最近、カウンターキッチンが流行ってるみたいだけれど、私には無理。四六時中家族と顔を付け合わせている必要って本当にあるわけ？ 見たくもないものもあるじゃない。例えば男がとろろに生卵を和えていく時とか。壁に向かって集中（しているふり）でき

る空間ってとても重要だと思うの。

男は私の温度を察知して話題を変える。

「いい匂いしてるね」

きっと宇宙人なのよ。

意外と気を使う宇宙人。

「さて、だし汁、だし汁」

男は冷蔵庫から麦茶のポットを取り出して、適量を揺り鉢に加える。その出汁は私が作ったもの。男は出汁をとることが、とても難しいことだと思い込んでいる。水に昆布をいれて中火で温めていったら沸騰前に出汁パックに入れ替える。それだけじゃない。

私は男のとろろ汁作りのために、毎週のように出汁を用意する。健気な女。なんて。それさえしておけば機嫌がいいのだから簡単なこと。

きっと宇宙人なのよ。

簡単に丸め込める宇宙人。

男は青海苔を振りかけてとろろ汁を仕上げる。私は鯖の味噌煮を二枚の平皿に移してテーブルへ運ぶ。

「嗚呼、いい匂い」

男は再び呟いてテーブルにつく。いくら何でも「いい匂い」はとろろ汁のことじゃないでしょう。テーブルには大小の茶碗が並び、それらには異なる色で同じ模様が施されている。私は杓文字を握って、はじめに大茶碗を手取る。

「家庭で美味しい味噌煮を作る秘訣は、生姜じゃなくて大蒜を使うことよ」

男の顔が一瞬硬直するのを確認して、湯気の立つ茶碗を差し出した。

きっと宇宙人なのよ。

どうせ私も宇宙人。

「いただきます」

男は手を合わせると、恐る恐る鯖をほぐして口へ運ぶ。続いて、眉を持ち上げて目を丸くした。私はその様子にはくそ笑みながら、十六穀米を口へ運ぶ。男はズルズルととろろ汁を啜りはじめた。

馬ゾンビ鹿ゾンビ

御前に関して言えば、ただの馬野郎だ。

彼奴は後頭部を掻きむしって雲脂をまき散らす。

例えばこんな馬具合。

御前はこめかみに親指を押し当てて顔をしかめる。
「何ついたらいいんだろうな。ホラあの、なんかニンニンするときあるじゃん？ 頭ん中がなんかニンニンってさ」

そんな馬野郎にをアイして止まない鹿野郎がいる。
「ニンニンッスか？」

彼奴は右の人差し指を握りながら左の人差し指を突き立てる。
「そのニンニンじゃねえよ。おまえ面っ白いこと言うようになったなあ」
「そうッスカねえ」

彼奴は顔を赤らめて後頭部を掻きむしる。雲脂をまき散らす。見るに耐えない。
おまえらを見ていると、本当に生きているのかって疑いたくなる。どこか人間味がな
いんだよ。ゾンビなんじゃねえのかって。

でも、ゾンビは好きさ（と言いたいね）。なんだか好きさ（と言いたいね）。好きになれる俺が好き。とは言え、実際に見たゾンビ映画なんてバタリアン、バタリアン2（途中まで）くらいなもんだ。バタリアンには参った。本当にお手上げだった。一〇代になったばかりの頃だ。親友と呼んでも差し支えないであろうあいつの家で見た。二、三週間ほど苦しい夜を過ごしたよ。二〇歳を過ぎて一人下宿で見たキューブにも参ったけれど、そんなの比ではない。
でもさ、いいよね。ゾンビ。

今となれば、一筋の光だ。希望の光だよ。なんと人類滅亡までもうすぐだ。それまでにゾンビを現実のものにしなければならぬ。二五年ぶりノーベル医学・生理学賞だ。ATOM なんか投資している場合じゃない。人型ロボットだって？ そんなもの人肉で作ればいい。初期化したヒト細胞で作ればいい。地球最後の人類が人肉ロボットに排除される。その時、人肉ロボットは人工物だという自覚を持つだろうか。人肉ロボットは飽きもせずヒト型ロボットを産みだし、やがて排除されることを望むのか。

アニマルじゃある まいし、繁栄なんて興味がないのよ。
「八王子ってくらいだから、やっぱ八人の王子がいたんだろうな」と、御前は言う。
「百人町ってのは実際百人の兵隊がいたそうッスよ」と、彼奴は言う。
「なんだよ、そのハクニンチョってのは？」と、御前は言う。
「あれッスよ。韓流ブームッスよ」と、彼奴は言う。
「おまえの母ちゃんが入れ込んでるあれか？」と、御前は言う。

そこで会話は途切れる。
彼奴は突然拳に力を込める。手の平に爪が突き刺さって血が滲むほどに力を込める。

そして、そいつを御前の顔面に強く強く打ち込んだ。
顔面から発したとは思えない音ともに御前の顔面は陥没した。
「母ちゃんを悪く言うな」

彼奴には、何故悪口に聞こえたのか。
そこが問題だ。

御前は死んだように思えた。でも、御前なら大丈夫。手荒いコメディアニメーションのように、顔面がひしゃげて歯が抜けている。上手くすればまだ笑える。御前は頬より

窪んだ鼻先を摘み、そいつを引っ張り出す。

愚ぬぬぬ怒っ。

多少の痛みは感じているのだろう。地鳴りのような呻き声を発しながら、御前はなんとか潰れた鼻を引っ張り出した。頬を二、三度叩いて顔の形を整えると、続いて、抜け落ちた前歯を拾い上げる。もう一方の手を口元に添えて、歯茎に前歯をねじ込む。舌先で歯並びを調えながら、眉間にしわを寄せた。

「イマチュアめが」

「母ちゃんを悪く言うからだろう」

彼奴は、眉をハの字に垂らしながら薄ら笑いを浮かべている。

こいつらを見ていると、本当に生きているのかって疑いたくなる。どうしたって人間味がないだろ。

「おまえら、やっぱりゾンビなんじゃねえのか」

御前と彼奴は目を合わせ、続いて、俺に目を向けた。

「ゾンビというのは、進化した俺たちのことか？」

俺は眉間に皺を寄せる。口をとがらせて斜めに持ち上げる。それはなんとというか、『進化』と呼ぶような格好宜しいものではないんだよな。『発達』という言葉のほうがまだ相応しい。

同時に、ヒトは何故思考する時に珍妙な顔をするのか、何てことも考えている。

「こいつを悪く言うなよ」

彼奴は再び拳に力を込め、血が滲む。御前の言うように彼奴は未熟なんだろう。

「やめておけ」

御前は彼奴の腕をとる。

知り合った頃の御前はこんな変に発達した野郎ではなかった。片割れの彼奴もいなかった。きっと御前が作り出した人肉ロボットなんだろうと思う。そして、また御前も彼奴によって細工された人肉ロボットなんだろう。どうしたらそんなことができるのか俺は知らん。でも、そんな解釈が一番納得できる。

最近、歳をとって体のポンコツさを感じるようになっておまえらゾンビが羨ましくもある。飯を食う度に体がだるくなり、腹のまわりにまた余分な肉が上乘せされる。おまえらならば、腹の肉を引きちぎって捨てちまうなんてこともできるんだろ。

でも、頭の中がニンニンするなんて勘弁して欲しいね。

彼奴は未だ狂った INU みたいに唇を震わせている。俺は眉を顰めて御前に目をやる。

「なあ、こいつは失敗作だろう」

御前は彼奴の腕を握ったまま俺の目の奥をのぞき込む。そして、ダンスでもはじめたのかと見紛うほど軽やかな動作で、彼奴の腋の下へ潜り込み、背中からその体を肩の上に担ぎ上げた。続いて、一方の手を両足に、もう一方を首にかけると、躊躇いもせずに背骨をへし折った。

彼奴は御前に担がれたまま、手足を踊らせて狂犬のように吼える。俺は顔をしかめて下唇を噛む。やがて彼奴は悶絶した。

「ゴッドって言ったな。聞いたか？ 背骨って折れるとゴッドって言うんだな」

Anyway...御前に関して言えば、ただの馬野郎だよ。

あんパン 20 個とか

出張手当が食事の実費支給に変わった。この鬱憤をはらすためには、何を食ったら会社にダメージを与えつつ己を満たせるか。その結果、たどり着いた答えがこれだ。

あんパン二〇個とか。

何のことだ？

二〇〇〇円あったら何が食えるかなってさ。

居酒屋だったらビール二つに肴を三品くらい食えるかね。

うまい棒二〇〇本とか。

ファミレスだったらサーロインステーキのサラダバーセットにグラスビールくらいつけられるかね。

モロッコヨーグル一〇〇個とか。

なんだそれは？

モロッコヨーグルを知らんのか。餓鬼の頃、壺のような容器に入った謎のヨーグルトらしき駄菓子を木篋で食っただろう。

あれか。今、二〇円もするのか。

そうだ。通常三、七グラムのところ、今では、四三グラムも入ったジャンボヨーグルもあるぞ。

二〇〇円くらいするのか？

以上するな。

ゲゲゲ。ふつうのヨーグルト買うだろう。ふつう。

モロッコヨーグルはヨーグルトではないだろう。カップラーメンが食いたい時にラーメンじゃないだろう。

うまいラーメンなら、その方がいいと思うが。

カレーが食いたい時にタイカレーじゃないだろう。

ドロドロのカレーが食いたいときに、サラサラのカレーは無いな。

それと同じだ。

モロッコヨーグルを腹一杯食いたい時にはやはりジャンボヨーグルなのだ。

ゲゲゲ。

パンに塗って食うという輩もいるらしいぞ。

おまえ、やたらとモロッコヨーグル通だな。

コンビニ弁当を食った後にヨーグルトを食っていたら、ふと、思い出したのだ。餓鬼の頃、壺のような容器に入った謎のヨーグルトらしき駄菓子を木篋で食ったなあ。で、食後はモロッコヨーグルでネットサーフだ。

…ところで、なんの話だったかな。

あんパン二〇個とか。

何のことだ？

二〇〇〇円あったら何が食えるかなってさ。

それだ。俺だったらやっぱり回転寿司がいいと思うんだ。白い皿なら二〇枚。絵皿なら一〇枚はいける。生中付けてもそこそこいけるぞ。

悪くないな。回転寿司はなかなかいいアイデアだ。しかし、己を満たすほど、会社から恩恵を受けているようで気が晴れん。

戦うのか。

そうだ。恩恵など受けてなるものか。かつ、二〇〇〇円を回収しきるのだ。

モロッコヨーグル一〇〇個では、自己犠牲が甚大過ぎるだろう。

あんパン二〇個とか。

あんパン二〇個か。

あんパン二〇個だ。

あんパン二〇個だな。

おじさんこちら

冴えない虎が刺繍されたスカジャンを羽織る。硬い股関節を懸命に伸ばしながらママチャリに跨がる。間の抜けたチンピラみたいでいいじゃない。何だか気分がいいじゃない。

自転車の前かごにはボトル一杯の使用済みサラダ油。先日、テレビ番組で東京油田のことを知ったんだよ。易々と共感した俺は黒く濁った廃油を回収所へと運ぶ。こんな形してeco野郎なんだよ。だって、長生きしたいだろう。ついでにかつて一世風靡したアイドルグループのCDも売りに出そう。リサイクル、リユース、3Rのあともう一つはなんだったっけか？

青信号を三連続ノンストップで通過。何だかとてもいい予感がするね。神社の脇を抜けて大通りへ飛び出す。四つ目の信号を折れたならブックオフの前でママチャリを停める。耳を劈くブレーキ音が響きわたり、辺りの視線を一斉に集めた。

「油足らんか」

眩きつつ、すぐさま首を傾げる。喧しいブレーキは油を差して直るのか。

鬼さんこちら 手の鳴る方へ

不意に届いた子等の声。俺は反射的に耳を立てた。「鬼さん」が「おじさん」と聞こえたんだね。三〇も後半になるというのに、未だおじさん過敏性が直らない。

おじさんに対する抵抗感。その反面、おじさんを「おじさん」と呼ぶ子等の無邪気な声に、嫌な顔せず振り返られるおじさんの余裕を備えていたいものだと願う。

俺は無理に笑顔を繕って辺りを見回す。しかし、そこいらには先を急ぐ大人等ばかり。「おじさん」の残響を辿れば、木々の隙間から覗ける赤い鳥居にぶつかった。おそらく声は神社の境内から届いたのだろう。

前かごから手垢まみれのCDが詰まった紙袋を取り出す。続いて、口をへの字にした。廃油ボトルをどうしたものか。こいつを抱えて買い取りカウンターへ向かったら、新手の強盗と怪しまれはしまいか。要らぬ不安にとりつかれた挙げ句、ボトルを前かごに残したまま店内へ入っていった。

忙しく動き回る店員等をかわしながら、どうにかカウンターにだどりつく。

「買い取りお願いします」

紙袋を差し出すと、女店員はすぐさま俺から顔を背けた。口臭でもしたかしらんと思わず口に手を当てるが、背後の棚に並んだいくつもの紙袋を指さした後、女は向き直った。

疲れた様子の女は若くない。

「査定に三、四〇分ほどかかりますが宜しいでしょうか？」

そんなにかかるのかと眉を捻る。そこで、世間が春休みであることに気がついた。要らないものを処分して再始動というわけだ。気づかぬうちに世間の波に乗っていたことに、どこか照れ臭くもある。

「ちょっと外に行っていてもいいのかな？」

一時間足らずだ。待ち時間に廃油を回収所を持って行けば丁度いいだろう。

「構いません」

年増の女店員は目尻に皺を浮かべながら、番号札を差し出した。同世代の女ならば問題ないだろうと、俺は微笑みを返ししながらそいつを受け取った。

鬼さんこちら 手の鳴る方へ

店を出ると、また声がした。耳を澄ませばその声はやはり神社からするようだ。

幼少の頃は俺もよく境内で遊んだ。本殿の高床のまわりには沢山の蟻地獄が罫を仕掛けており、蟻を見つけてはそいつを放り込んだ。油蟬が真っ白な身体を反らしながら羽化する様を見かけたときは息を呑んだ。神社に纏わる思い出は何故か虫たちとの戯れが多い。

僅かに覗ける真っ赤な鳥居に目をやりながら、自転車の前かごにヒラヒラ手を伸ばす。ヒラヒラ。ヒラヒラ。いくら伸ばしてもヒラヒラ。俺はそのままハンドルにわき腹を打ちつけた。

「てっ！」

眉を顰めて前かごに目をやれば、あるべきものがそこにはない。

「れっ？」

声に出して目を丸めた。

廃油ボトルが無くなっていたのだ。東京油田に貢献したく、無駄にたっぷりと油を使って、唐揚げやら、豚カツやら、カリカリになるまで揚げ続けた。連日の揚げ物に胸焼けしつつ、ようやくボトル一杯に溜め込んだ廃油が無くなっていたのだ。

俺は呆然としながら、指先で頬をひっ搔いた。

鬼さんこちら 手の鳴る方へ

胸がざわついて、目を細める。眉間の力を抜いて、耳に意識を集中させる。子等の声がある。手を打って俺を囁し立てる。それならばと、俺は手の鳴る方へ歩みをはじめた。

鬼さんこちら 手の鳴る方へ

幼少の頃、何処にだっていたらう。人懐っこくなんだか小汚いおっさん。妖怪みたいなおっさん。酒で潰れた声してさ。何言ってるんだか分かんねえよ。どうやって歳を重ねたらあんな風になれるのか。あの頃の艶々した俺等には全く想像がつかなかったね。きゃっきゃキャッキヤ言いながら逃げ回ったのは、「きったねえ」とか、「くっせえ」とか、そんな意地の悪い思いがあったからだろう。

鬼さんこちら 手の鳴る方へ

そして、俺は真っ赤な鳥居をくぐる。境内には手を打って駆け回る子等。笑顔に溢れ、その輝く目玉等の一つもこちらを向いていない。

れ？

目玉等が一つもこちらを向いていないではないか。俺は眉を捻って唇をつきだす。続いて、口を衝いて出た。

「おじさんこちら」

途端、顔が火照る。

おじさんとは、こんなに小賢しい者なのか。こんなに怯え、戸惑うものなのか。俺の知っている、あの人懐っこくなんだか小汚いおっさんには程遠い。

俺は頭を振るって声を上げた。

「おいおいっっ」

子等は足を止め、輝く目玉等が俺に向けられた。しかし、目玉等は直ぐに輝きを失い、不安の色に染まる。その色を拭う術など俺は知らない。それどころか俺の頭には一匹の妖怪が浮かんでいた。幼い頃、俺の学習机に並んでいた妖怪図鑑にもいた「油ずまし」だ。

ゆっくりと鼻息を吐きながら不敵な笑みを繕う。

「油を知らんか？」

俺はやむを得ず妖怪になりすます。

酔ひもせず、ん

エレベーターの無い旧式マンションを懸命に駆け上がり、玄関チャイムをリロリロ連打する。そして、俺を出迎えた女の肩を両手で捕まえた。

「こいつは本当に完璧なアシストをするんだな。電気自動車は自動車を超えられないが、電動アシスト自転車というヤツは遙かに自転車を越えている。効果がこんなに実感できるなんて、完璧なアシストじゃん」

興奮のあまりヨコハマ弁で唾を飛ばしながら、女の肩を揺らす。

「どうしっちゃったっのよ」

俺は胸の高鳴りを押さえきれない。自転車で街中を駆け回って、階段を五階まで駆け上がったからではない。電動アシストの威力を実感して、その自由度の高さに感動しているのだ。

「軽くて、軽いし、軽すぎるよっ」

重力という柵をふりほどいて駆け抜ける快樂。それでいてバイシクル。

「あくまでバイシクルなんだよ。モーターサイクルでないところが憎いじゃないか。己の貧弱な脚力が軽々と重力を打ち破る快樂。これだよ。この万能感っ」

女は顔をしかめて口元に人差し指を立てた。

「あの子、寝てるから」

こいつの出はじめって明らかにオバハンの乗り物だったろ。三輪自転車に次ぐオバハンの乗り物だったろ。子供が生まれて女が必要だと言い出すまで、こんな乗り物と暮らす日々がやってくるとは思わなかった。併せて俺の自転車も購入したわけだが、断固としてノンアシスト自転車を選んだ（金銭的理由も大いにある）。しかし、ここは生まれ育ったかつての武蔵野原野とは異なるアッペンダウンの激しい土地柄。日々衰えを感じずにいられない昨今、ノンアシストではとてもいられなくなってきた。

そして、4Lビッグマンをカクヤスに買いに行こうとしたところ、ふと充電中のバッテリーが目にとまったのだ。

「これって、やっぱ楽なん？」

女は、子供と一緒にアニメDVDを見ながら素っ気なく答えた。

「乗ってみればいいじゃない」

ごもつとも。

そして、バッテリーを抱えて家を出れば、その確かなアシストに度肝を抜かれた。俺は背中に翼が生えたかのように街中を縦横無尽に走り回った。ビッグマンなんてどうでもいいじゃん。この万能感があれば、斟酌しながら浮き世をフワフワ漂う必要なんてないじゃん。

「でさ、自転車で街中を駆け回ってさ、階段を五階まで駆け上がってさ、ヨコハマ弁で唾を飛ばしながらさ、おまえの肩を揺らしてる訳じゃん」

「だから、止めなさいって」

女はいつの間に護身術を学んだのか、見事な正面对処法を繰り出す。俺の目の前で合掌したかと思えば、そのまま両手を垂直に突き上げる。そして、平泳ぎでもするように両手を広げれば、鼓膜をぶち破る勢いで俺の耳に平手を打ち込んだのだ。

「自ら両手を塞ぐなんて素人ね。旦那じゃなかったら股間を蹴りあげてやってもよかったわ」

俺は崩れ落ちる。初デートでディズニーランドに行ったのに別れなかったとか、一緒に焼き肉を食べるようになったから一段落クリアとか、そんなことを聞かされていた青い頃が走馬燈のように巡る。最近では、そんな他愛ないハードルが用意されておらず、先の見えない緩やかな上り坂が続いた。

不意にかつての約束を思い出す。

「先に死なないでよね」

金的されなかっただけ愛としようか。やっぱり、それが最終ゴールなんだろうね。俺は片膝を着いてどうにか踏みとどまる。

「死なねえよ」

女は首を傾げながら手を差し伸べる。さすがにその手を取る気になれず、俺は壁を這うように立ち上がった。

「よっこらしょ」

「おっさん」

さて、本題だ。

「色は匂へど 散りぬるを」

「なによ」

「我が世誰そ 常ならむ」

「なんなのよ」

「有為の奥山 今日越えて 浅き夢見じ 酔ひもせず」

「ひとまず靴脱いだら？」

そりゃそうだ。俺は靴を脱いで、バッテリーを拾い上げる。そして、背を向ける女の後に続いた。

「日光の中禅寺湖あたりにイロハ坂ってのがある」

「聞いたことあるわね」

「小さい頃、家族でドライブしたんだ。カーブを曲がる度にイ、ロ、ハって言いながらさ。俺の記憶ではカーブ毎にイ、ロ、ハの標識が立っていたように思うのだが、記憶違いかもしれない」

女は冷めた湯飲みに口を付けて、興味なさそうに頷く。

「でだ。そいつを確かめに行きたい」

俺がバッテリーを持ち上げると、女の眉が奇妙に歪んだ。そして、その顔にはヒトリデドウゾと書かれている。

この完璧なアシストをもってすれば、有為転変の奥山を越えて、寂滅為樂の暮らしを

手に入れることができるだろう。

俺はそう確信したのだ。

バランスボーイ

頬に畳の痕をつけて顔を上げる。脂ぎった髪をかきあげる。

「ああ、気持ちワル」

こみ上げる胃液を飲み下しながら、我が家の臭いに安堵する。マグカップ一杯の水道水を飲み干して、湿った衣服を脱ぎ捨てた。ユニットバスの汚い便所に顔をしかめながらシャワーを捻る。口を開いて天井を見上げる。口を溢れた湯が体を伝って流れ落ちたところで口を噤んでピュウと吹き出す。マーライオンを思い浮かべながら二、三度繰り返すと、頭を垂れて髪を掻いた。

「全部流れっちまええ」

抜け落ちた髪が風呂桶の排水溝で渦を巻く。続いて、見慣れぬ陰に一步退いた。ゴキブリでも流れ落ちたか。俺はシャワーを止めて、排水溝に目を凝らす。しばらく待ったが、這い上がってくるものはなかった。

タオルで頭をこすっていると、姿見に映る自身に違和感を覚えた。

「痩せたかな」

随分と体がすっきりしたように見えたのだ。続いて、俺はタオルを投げ捨て、奇声を発しながらゴリラのドラミングさながら胸を連打した。そして、排水溝に流れていったモノを思い返す。やや黒ずんだチャパネゴキブリのように見えたが、そうではない。

胸にあてた両手をゆっくり離し、あらためて鏡に映した。

「乳首がねえ」

敷きっぱなしの布団に目を落として、まず思うのは裸のA子。あいつはこれを見て何と言うだろう。幸い海で遊ぶような趣味はない。銭湯に行くなんてガスが止まったときくらいなもんだ。それを弄んで快樂を得ようという嗜好もない。落ち着いて考えれば実質的に困ることは何もない。

「だよな」

何も困らないという判断に落ち着き、俺は洗濯かごから引っ張り出したシャツに鼻をあてて袖を通す。胸に触れる綿の感触が少々頼りないが、UNIQLOのTシャツに501のボトムを合わせれば、いつもの俺と変わらない。そして、いつも通り一眼目をサボって次の講義へ向かった。

大学名を冠した商店街を行けば、B作が古本屋の店頭で日焼けした文庫本を物色して

いた。いちいち阿呆なことを言う面倒な奴だ。気配を殺して通り過ぎようとしたところ、一冊の本を手にしたB作が振り返った。俺は嫌悪感を丸出しにして、下顎を突き出し眉を顰めた。

「どうしたんだよ。乳首がもげたみてえな顔しやがって」

俺は目を丸めて立ち尽くす。

ナゼソレヲ？

言いかけた言葉を飲み込む。彼奴ならばあり得ないこともなきにしもあらず。突飛なことを口走っては、聞き流す俺を悪のように扱う下司野郎なんだよ。今回ばかりは聞き捨てならぬが、言い返す言葉も思いつかず、俺は逃げるように歩き出した。

「すぐに生えてくるって」

B作の戯言がいつになく腹立たしく響いた。

商店街を抜けると大学まで住宅街が続く。その道すがら俺は妙な考えに至った。

ヒョットシテミンナソウナノカ？

男ならば要らぬ毛が生えたり、あんなところの皮がむけたりするではないか。中高生の修学旅行などでは、発毛だの、剥皮だのが必ず議論される。しかし、乳首の生え替わりに関する話はとんと聞いたことがない。毛だの皮だのは阿呆丸出しの第二次性徴期に生じる変化のため、騒ぎ立てる輩が多いのか。乳首の生え替わりは成人してから生じるから騒がれない。精神年齢がロウティーンで止まったB作のような奴だけが騒ぎ立てるものなのかもしれない。

ソウニチガイナイ。

幾らか気分が軽くなる。そして、やはりB作は阿呆な奴だと鼻を鳴らした。

講堂にたどり着くと、二限目の講義は既に始まっていた。俺は最後座席にそっと滑り込む。そして、回ってきた名簿に名前を記入するとすぐに安眠についた。

終了のチャイムとともに腹が鳴る。そして、寝起きの目を擦りながらA子に電話した。

「飯食う？」

「ゴメン、C菜と約束してるから。夕飯食べよ。アパートで何か作ってもいいよ」

「じゃあ、赤飯かな」

「お赤飯？」

ナンデモネエヨ。

俺は仕方なく、大学生協で菓子パンと牛乳を買ってサークル会館へ向かう。そして、部屋に転がっているギターを抱えて、唯一覚えたミッキーマウスマーチを爪弾きながらパンを囓った。

ながら飯はいけんよ。

母親の声が聞こえた気がして、俺はパンを喉に詰まらせた。牛乳で流し込み、胸を叩く。呼吸を取り戻したところで、俺の指先は胸をさすっていた。やはり無い。Tシャツの丸首を摘んで覗き込む。やはり無い。

シャツの下から手を突っ込んで胸を弄っていると、後輩のD吾が部屋に入ってきた。俺は咄嗟に腕を抜く。そのまま大きく腕を回して、ギターの弦を弾いた。

「何やってんすか？」

「ウインドミル奏法」

「何すかそれ？」

「ピート・タウンゼント知らんのか」

D 吾は首を傾げて鏡を拾い上げると、アシンメトリーに伸ばしたV系ヘアをしきりに気にし始めた。パンを囓りながらその細身の身体をぼんやり眺めていると、視線は無意識に胸元へ運ばれる。マンガみたいな顔したD 吾には乳首が無くてもおかしくない。大体において少年マンガの男キャラには乳首がないだろう。あれって、なんでなんだ？ それを決定づけたのはキン肉スグルではないかと推測する。気付けばパンダみたいなメイクのD 吾が俺を見つめていた。

「何スか？ 今日、変スよ」

超現実的な顔でぼそり呟くD 吾に、俺の腹は一気に沸点へと昇華する。

「そんな顔に言われたくないわっ」

捨て台詞を吐いて部屋を出た。まだ寒さの残るキャンバスで肩を怒らせながら足を踏み鳴らせば、頭の中をミッキーマウスマーチがループする。頭を振るって時計を見上げると三限目までまだ三〇分以上もある。俺は大きく溜め息をついてベンチに腰を下ろした。

「なんか苛々すんなぁ」

貧乏揺すりしながら世間を睨みつければ、また無意識に胸を弄っている。すぐに生えてくるって。B 作の戯れ言を思い返す。ヒョットシテミンナソウナノカ？ そうじゃないだろう。ヤバい病気だと考えたほうがまだ自然だ。ウィルスか何かの仕業だとすれば他人に感染するのか。A 子と肌を交わすのもやめるべきか。

うなだれて頭を抱えていれば、足下に人影が現れた。

「おおい、めでたい話を聞かせろよ」

顔を上げると、意地の悪そうな笑みでボブを揺らすC 菜が立っていた。

「めでたい割には随分しょぼくてんなぁ」

俺は眉を顰めてC 菜を見上げた。

「なんでめでたいんだよ。ってか、A 子と一緒にだったんじゃないのか？」

「あんたに赤飯作るって、大角豆探しに行ったよ」

「ササゲ？」

「はっ？ あんたら二人して大角豆を知らんのか。赤飯食う資格ないぞ」

まさか本気で赤飯を作ろうとしているとは。なんでも本気にする女なんだよ。C 菜は俺の頭上で唾を飛ばし続けた。

「あんたも赤飯は小豆で作ってたのか？ 小豆は茹でてる途中で腹が割れるから縁起悪いんだよ。ササゲは捧げにも通じるだろう。めでたい時こそ大角豆で作んなきゃ意味ねえんだよ」

「なんもめでたかねえよ」

俺はため息を付いて、C 菜のお喋りから逃れるように立ち上がる。立ち上がればC 菜は俺より三〇センチは低い。上目遣いになるその顔は可愛らしくもある。喋り方さえ直せば言い寄る男も多いだろう。

「おまえ、俺に近づかないほうがいいぞ」

「なんだよ。急に偉そうに。あんた、A子にもそんな態度とってるんじゃないだろうね」

「感染るぞつつてんの」

C菜は眉を顰めて一步後ずさる。

「もしかして、B作が言ってたやつ？」

俺は目を丸めて一步近寄る。

「B作のヤツ、何か言ったか？」

C菜はさらに一步後ずさる。

「あんたの乳首が腐ってもげたって」

俺は立ち眩みを覚えて、必死に堪える。

「腐っちゃねえよっ。おまえは女だから分かんないんだよっ」

「なにがよ？」

「男は乳首が生え代わるもんなんだよっ。女の胸が膨らんでくのと一緒だっ」

勢いに任せて言い切ってみる。C菜は眉間に皺を寄せたまま七秒ほど硬直し、ゆっくりと口を開いた。

「そうなの？」

男を知らないC菜でよかったと心底ホッとする。

「だから赤飯なんだよ」

さらに三秒の間の後、小声で尋ねる。

「じゃ、感染るって何よ」

俺が怯めば、C菜は追い込む。

「どういうことよ？」

下顎を突き出して煙に巻こうと試みるが、A子のように簡単に見逃してくれる相手ではない。俺は追い込まれた挙げ句に口を滑らせた。

「おまえも男みてえだから、乳首取れんじゃねえの？ ってばよ」

よく知りもしないアニメキャラクターの口調を取り入れたのは、マズいことを言っていることに気付いていたから。案の定、C菜は絶句する。そして、瞳に涙が滲む。これがC菜のやり口なのだ。

「非道いじゃないっ」

キャンバスにC菜の声が響いた。

「ちょっと待てよ」

肩に手をかけると、C菜はそれを全力で振り払った。

「触らないでよっ」

すると、解かれた俺の腕が何者かに捕まれた。驚いて振り向けば、超現実的パンダが俺を見ていた。C菜も驚いたように目を見開く。D吾は表情一つ変えず牛乳パックを突き出した。

「牛乳の飲み止しを部屋に起きっぱなしにすんの止めてください」

「あ、わりいな」

「わりいなじゃないッスよ。何度目ッスカ。いっつも言ってるじゃないッスカ。もうだいぶ暖かくなってきたンスから、腐って臭くなるンスから、頼みますよホント」

呆れ顔のパンダ、涙目のオトコ女、おまえらはどこまで俺を追い込んだら気が済むのだ。絶壁を背にした俺が何をしでかすか、おまえらには想像もつかなかっただろう。

俺はD吾の手を振り払い、声を張り上げた。

「他人に絡んで楽しんでじゃねえよ。暇ぶっこいてんなら、おまえ等二人でディズニーランドでも行ってこいっ」

そして、俺は二人の間を掻き分けて歩き出した。気が弱いから耳は立てている。それでも二人の声は届かなかった。絶句で顔を見合わせているのだろうか。俺は振り返ることもできず、正門方向に歩き出してしまった都合上、キャンパスを後にした。

住宅街を抜けて、大学名を冠した商店街に入る。B作がいたら殴ってやると心に決めたら、レンタルビデオ屋から出てきやがった。いるなよ。面倒臭えな。

殺気を漲らせた俺にB作は気付く。すると、彼奴は如何にも余計なことを言い出しそうな嫌らしい笑顔を浮かべた。

「いいなあ。俺にも赤飯食わせろよ」

「誰に聞いた？」

「なんだよ、怖い顔して。さっきAチャンが通ったぞ」

「余計なこと言ってねえだろうな？」

「余計なこと？」

「おまえ、C菜に要らんこと言っただろ」

「要らんこと？」

B作は眉間にしわを寄せて、視線を天に向ける。

「俺が残した海老フライの尻尾食ったことか？」

「んなことどうでもいいだろう」

俺は顎を突き出して胸を打つ。そして、指先で三度つついた。

「ち・く・びっ」

「ああああ」そんなことかと、つまらなそうにB作は続けた「おまえが乳首みたいな顔してたってやつか」

「違うだろっ。腐ってるって言っただろっ」

「なんて言ったか忘れたよ？」

「腐ってるって言ったんだよっ。ちょっと来いっ」

俺はB作の胸ぐらを掴んで引っ張った。

「おいおい。何カッカしてんだよ。服引っ張んなよ」

俺は襟元を掴んだまま構わず歩き続ける。そして、B作をコンビニの便所まで引きずり込むと、おもむろにTシャツを脱ぎ捨てた。

「おいおいおいおい。そんな趣味ねえぞ」

俺は顎を突き出して胸を打つ。そして、指先で三度つついた。

「ち・く・びっ」

「ああらま」

B作は目を丸めながら俺の胸板と顔を交互に見やる。俺は恐る恐る自分の胸元を見下ろす。相変わらずあるべきものがそこにはない。

「おまえ、ついに哺乳類やめたのか？」

不意にD吾の顔が浮かんだ。真っ白な顔から舌が伸びる。スプリットした舌先がチロチロばた足のようにはためく。鳥肌が立てば、俺の身体はますます哺乳類から遠ざかる。慌ててTシャツを纏うと、予定通りB作の鼻先に拳を打ち込んだ。そして、呻き声を水洗便器に流して便所を後にした。

走ったら負けだ。発狂したらお終いだ。俺は強く地面を踏みしめながら、喉元からこみ上げる叫びを噛み締める。頭を振るってD吾の残像をかき消す。体中を平手で叩いて鳥肌を押さえ込む。鼻歌でミッキーマウスマーチを吹かす。鉄骨階段を鳴らしながらアパートをのぼり、そして、我が家のドアを拳で殴打した。

「誰？」

A子のか細い声がする。

「俺っ」

そして、俺はTシャツを脱ぎ捨てる。僅かに開いたドアに手をかけて両手でこじ開ける。ドアノブを握るA子が引きずり出され、俺の平たい胸に飛び込んだ。俺はA子を抱き締めるとアパートの中へ押し戻し、敷きっぱなしの布団の上に倒れ込んだ。

押しつぶされそうな程の不安の中、しがみつけるものが必要だった。体表面の感覚器官（何故かそれは毛穴のような気がしている）を野晒しにしていられない。強く強くしがみついていないと立っていられない。寝てるけど。

「ちょっと、大丈夫？」

「大丈夫なもんかぁ」

俺は声を絞り出し、A子の上に跨がったまま上半身を起こす。顎を突き出して胸を打つ。そして、指先で三度つついた。

「ち・く・びっ」

「ああらま」

ああらまじゃねえだろ。なんでB作と同じリアクションなんだよ。おまえ等できてんじゃねえのか。くだらない考えが頭をよぎり、頭をかきむしる。再びA子を見下ろせば、握った両手を口元にあてながら小さく震えていた。

「なんだよその顔は。分かってんだよ。哺乳類やめたのかとか言い出すだろう」

A子は首を振る。そして、目を逸らす。溜め息を漏らして俺を乗せた腹がしぼんでいく。俺は再び覆い被さり首筋に牙を剥く。A子の息が荒くなる。その溜め息を掻き消すべく執拗に全身を這い回った。

A子は時折声をもらしながら俺に応える。

「例え、全ての毛が抜け落ちて、鱗が生えても、粘膜に覆われても、大丈夫」

眉間を力ませて唇を強く結ぶ。おいおい。

「爬虫類でも、両生類でも、好きだから」

そして、一筋の涙を零した。おいおいおいおい。

「盛り上がってんじゃねえよっ」

俺は立ち上がり、A子から飛び退いた。その時、テーブルの上でピンクの携帯が震えた。そのディスプレイにはC菜の名前。

「出なよ」

俺は顎を突き出す。A子は俺に視線を向けたまま、恐る恐る手を伸ばした。

「A子大丈夫？ あいつに変なことされてない？ 何かさっき苛々してたみたいだから」

C菜のデカイ声は筒抜けだ。

「でも、ちょっとアリガト言っといってもらいたいよね。なんか年下の男とディズニーランドに行くことになっちゃった。この私がディズニーランドよ。ディズニーランド」

その後、ディズニーランドという言葉が何度連呼されたらうか。俺の頭はエレクトリカルパレード。目眩がして倒れそうだった。C菜の声が切断されれば、再び六畳一間が静寂につつまれる。そして、目を赤くしたA子が微笑んだ。

「アリガトだって」

俺は小刻みに頷く。

「ねえ、男の乳首って必要なの？」

幸い海で遊ぶような趣味はない。銭湯に行くなんてガスが止まったときくらいなものだ。それを弄んで快樂を得ようという嗜好もない。落ち着いて考えれば実質的に困ることは何もない。

「だよな」

炊飯器がシュコシュコ音をたてながら水蒸気を吐き始めた。

赤飯って炊飯器で作れるのか。

俺は話を逸らすタイミングを伺っている。

押し入れの中へ

束の間の休日、畳でゴロ寝している親父を発見したおまえは、ブロックの詰まったポリバケツを抱えて押し入れの前に立つ。そして、勢いよく襖を開けた。

おまえはポリバケツの上から短い足を懸命に伸ばし、押し入れによじ登りはじめた。

止めるべきかな。

悩む時点で止める気などないのだろう。足を踏み外したところで、柔軟な身体を畳に弾ませるだけのこと。俺は狸寝入りを決め込んだ。おまえは幾重にも積まれた布団を押し分けて、押し入れの中へ。何をしようというのか、俺には分かっている。そして、おまえは親父がお気に入りの草のキャンディー枕を求めて、布団の隙間へ潜り込んでいった。

そこは狭くて真っ暗な空間。おまえは暗闇が怖い。宇宙みたいじゃない。何もないゼロみたいな無限じゃない。どこまでも続く無限みたいなゼロじゃない。

誰しもかつてはそうだった。日の短い季節、おともだちに手を振れば、どこまでも続

く家路を一気に駆け抜けた。

大人になんかなれないよ。毎晩、夜遅く会社から帰ってこなくちゃならないんだろう？

大丈夫。いつのまにやら平気になるもんさ。でもね、これはママには内緒だよ。馴れない夜道は今だって怖い。それでも奥歯を噛みしめなければならないときがある。

おまえは柔らかな毛布の洞窟を奥へ奥へと進んでいく。目が慣れてきたのだろうか、あたりがうっすらとピンク色に光っていることに気付く。ガサゴソと忙しない足音に振り返れば、自分より何倍も大きな虫の亡骸を引っ張るアリンコがおまえを追い抜いた。その亡骸はお尻半分がなくなっていて、内蔵なんかは干からびて真っ黒な抜け殻みたいになっている。おまえはその中にそっと飛び乗った。干からびた消化管に足をかけて、節の部分の柔らかいところから顔を突き出せば、後ずさりながら進むアリンコが見下ろせた。

「なあ、枕を探しているんだ」

アリンコはまるで興味がない様子でせっせと獲物を引きずっていく。

「い草のキャンディー枕なんだけどなあ」

すると、アリンコは立ち止まる。獲物を離しておまえに大きな顎を寄せた。

「キャンディーだって？」

「枕だよ」

「枕？」

「枕を知らないの？」

「あんまり縁がないね」

アリンコは途端に興味を無くし、再び亡骸を引っ張りながら進み始めた。

「あてもなく探しているんだ。ちょっと乗っていていいかな？」

アリンコはなにも言わずに歩き続けた。返事がないなら「いいよ」ってことなんだろう。そんなことを言われた気がするよ。

亡骸のソリに乗って進めば、間もなく何かが現れた。

「テントウムシっ」

違う違う。向こうからやってきたそれはおまえの大好きなそれじゃない。シバンムシだ。干したい草が大好物な、ニンゲンにはあまり好かれない害虫だね。でも、シバンムシだと思えば、途端にシルクハットでも被っていそうだろう。

おまえはソリから飛び降りて、シバンムシに問いかける。

「なあ、枕を探しているんだ」

シバンムシはまるで興味がない様子で触角を撫でている。

「い草のキャンディー枕なんだけどなあ」

すると、氏はピンと触角を立てて、シルクハットを手を取った。

「お困りのようだね。一緒に探そうか？」

「本当かい？」

「本当だとも。見つかったときにそいつを一囓りだけさせてくれればいい」

「ひとかじり？」

「一口、カリッとするだけさ」

ドシンッという尻餅で、俺は狸寝入りから飛び起きた。

「おいっ、大丈夫かっ？」

おまえは何もなかったかのように立ち上がり、俺の抜け毛が張り付いた畳の上にいる草のキャンディー枕を差し出した。

「寝てていいんだよ」

「あ、ども」

そんなこんなで、俺の枕には小さな虫食い穴があいている。

ネックを掴んで振り被る

いや。本当に感動したんだよ。

ショッピングセンター五周年記念で開催された、芸人のパフォーマンス。ジャグリングでは世界二位の実力を誇る青年の顎から滴る汗を目の当たりにし、年々弛む涙腺が、案の定、決壊した。年甲斐もなくヒックヒック喉をひきつらせていれば、幼子を抱く若い女に怪訝な視線を浴びせられ、俺は途中退場を余儀なくされた。

焼けるアスファルトの上を歩きながら、高鳴るの鼓動が押さえられない。ひとまず手近な方法でこの思いを処理すべく、スマートフォンに目を細めた。看板に掲げていた名前を思い返ししながら、ツイッターのアカウントを検索する。@マークに続いて、その名をアルファベットで打ち込めば、記憶に新しい青年の顔写真が現れた。

そして、俺は未だかつて無いほど鮮やかなフリック入力で、思いの丈を紡いだ。

いやいや感動したさ！俺もナニかを見つけるさ！まだ見ぬナニかを探しに行くのさ！自分を偽らず生きていくのさ！

俺は一度音読してから悦に入り、迷い無く投稿ボタンをタップした。

そして、俺は歩き出す。何処へって、トイザラスさ。何をするのかって、買い物に決まっているだろう。前々から買おうか買うまいか迷っていたものがあったのだ。

「やろうかやらないか迷ったらやってみることだよ」

大学時代の先輩が言っていたね。汗っかきの泥臭い男でさ。憎めない笑顔ばかりが焼き付いている。学生当時は、それほど思い入れのある男ではなかった。歳を重ねた今になって、誰よりもあの男の笑顔を思い出す。確かにあんたの言うとおりだよ。

トイザラスで、ファーストアクトってエレキギターが、三九八〇円で買えるらしい。我が敬愛する和製グラムロックスターのツイートで知ったのだ。トイザラスでギター。何

かと都合がいいだろう。楽器屋で大枚を叩くほどの財はない。そのうえ、楽器屋で買おうものなら、否応なく試し弾きとやらを強いられるわけだろう。弾けないギターをどう試す？ そして、なにより都合のいい雰囲気が醸し出せる。

「プレゼント用ですか？」

「はい」

俺は迷い無く応えた。

「リボンはどうされますか？」

「ミドリ」

リボンのサンプルに指を指し、息子へのプレゼントなんだという雰囲気を醸し出す。醸せ醸せ。目を細めて、一時はプロを目指したこともあったよなんて雰囲気を醸し出す。醸せ醸せ。不惑の前にはじめて手にしたギターを掲げ、最初から高額なギターなんて必要ないのだと知った風な雰囲気を醸し出す。醸せ醸せ。一通り醸し出したところ、結局、店員からはリボンの色以上の追求はなかった。

店を後にして一息つけば、あたりはすっかり暗くなっていた。店員からの追求を如何にかわすか、シミュレーションにシミュレーションを重ねてレジに挑んだが、どうやら取り越し苦労であったようだ。おそらく俺から醸し出された往年のギタリスト的雰囲気が、あまりに完璧だったのであろう。

家へと向かう道すがら、県道が交差する信号機に立ち止まる。ギターを抱え直して、辺りを見回せば、中央分離帯に佇むオッサンが一人。ハイスピードで抜けていく車に阻まれ、身動きがとれない。赤信号を無理矢理渡ろうとして取り残されたのだろう。白のランニングで腹を突き出した成りは山下清を彷彿させる。ドラムスティックを両手に突き上げれば石川浩司にも見えるが、おいおい、肩からギターを下げていやがる。そのソフトケースには、俄音楽ファンの俺でも聞いたことのあるブランド名が記されていた。

途端にオッサンのランニングがぼんやりと発光し始め、何者でもない俺が闇にかすんでいく。いつもそうだ。いつだってそうなんだ。そして、俺は信号が黄色に変わったことを確認すると、一本三九八〇円のトイザらスギターの包装を破りはじめた。続いて、ネックを掴んで振り被る。信号が青になると同時にオッサンのもとへと掛け寄り、十分な位置エネルギーと貧弱な腕力を駆使して、まだ熱を帯びたアスファルトにそいつを叩きつけた。

さようなら。タコ

踏切なら駅から離れたところにあるそれがいい。遮断機に手をかけて全速で駆け抜ける列車に口を突き出す。ワギャワギャワギャって声を荒らげる。列車はプワァーンと応

えた。

大きな耳に長髪を引っかけた女が、眉間に皺を寄せて振り向く。続いて、禿げの爺さんが俺の頭を小突いた。

「何やってんだおまえ」

「痛っ」

大きな耳した女は嫌いだ。宇宙人みたいで気味が悪い。脳天がガパッと二つに割れてホタルイカみたいのがいっぱい出てくるんだろう。俺は夕子を手招いて、その可愛らしい耳に口を寄せる。コショコショコショって鼓膜を擦る。

「何？」

「コショコショコショって言うだけ」

夕子はクスクスと笑う。俺はその表情のない顔を見届けてから本題に移る。

「ねえ夕子。あのヒト、宇宙人だよ」

本当はユウコなんだけど、タコって呼んでいる。そのほうが可愛いだろう。夕子にはいつも小さな声で話しかける。デカ耳になってしまったら可哀想だから。

踏切が開くと、デカ耳女はヒールを鳴らしながら足早に歩き出す。そして、禿げの爺さん、俺、夕子の順に続いた。俺は女の黒光りする頭を見上げていた。ずっと見ていたら、そのうち長い髪をかき分けて見張り番のホタルイカが顔を出すに違いない。俺は知っているぜ。人類の半分は人工物で、四分の一は宇宙人なんだ。まともなニンゲンなんて時期になくなるさ。

橋の上に差し掛かると、禿げの爺さんが立ち止まった。俺は爺さんの骨っぽい尻にぶつかり、夕子が俺の背中にぶつかる。そこで、夕子はケタケタと声を上げた。ここでやらなきゃならない決まり事。夕子が笑うから。表情一つ変えずに声を上げるから。頬筋が上手いことになっていないんだ。

「夕子のユウは夕焼けのユウ」

ここは夕焼け橋。禿げの爺さんは川上の向こうに沈む夕日を眺めながら、ぼんやりと呟いた。俺は密かにタコ焼き橋と呼んでいる。

夜になると禿げの爺さんは部屋に籠もったきり出てこない。夕子を寝かしつけるのは、いつだって俺の役割だ。一緒に布団に潜り込んで、色んなことを教えてあげる。それは主に禿げの爺さんについてのことだ。

禿げの爺さんは、震える右手を左手で押さえながら培養皿の細胞をメンテナンスする。明日の糧となる幹細胞をフラスコで育む。肉を生み出す。臓物を生み出す。そして、夕子には筋芽細胞。

「こわいね」

夕子は唇を振るわせて涙をこぼした。

「大丈夫。ああ見えてただの禿頭じゃないんだから」

耳を澄ませば聞こえる。増殖を続ける筋芽細胞のブクブクって音。増殖を終えた筋芽細胞が融合を繰り返し、紐状の筋管細胞になるクチュクチュって音。筋管細胞が集合し、整列して繊維を作るシュルシュルって音。夕子の笑顔までもう少し。

「いつになったら眠れるの？」

「目を閉じていれば眠れるよ」

俺が眠れない時、禿げの爺さんがよく言っていた。そんなことしたって眠れない時は眠れない。そう思いながらも気づけば朝を迎えていた。

「何？」

「コショコショコショって言っただけ」

夕子はクスクスと笑いながら、口角を持ち上げた。俺は驚いて目を丸め、禿げの爺さんはホッとした表情で目を細めた。その顔は全くの年寄りだった。

いつだってピンポンっは不意に訪れる。とても嫌な予感だ。禿げの爺さんは無い歯で皺々の唇を噛みしめる。そして、玄関の扉を開けば、そこにはデカ耳女が立っていた。禿げの爺さんは夕子を手招く。夕子はペタペタと湿った足を鳴らして玄関へ駆けていく。反射的に俺もその小さな背中を追いかけていた。そして、小声で耳打ちする。

「ねえ夕子。あのヒト、宇宙人だよ」

夕子は首を傾げた。俺のことなんて知らないというように。

大きな耳に長髪を引っかけた女が、眉間に皺を寄せる。続いて、禿げの爺さんが俺の頭を小突いた。

「何言ってるんだおまえ」

「痛っ」

夕子が玄関に腰を下ろして真っ赤な靴に足を通すと、デカ耳女はヒールを鳴らしながら足早に歩き出す。そして、夕子はその背中に続いた。

「なあ爺さん。今度は俺の記憶も一緒に消してくれよな」

俺は知っているぜ。人類の半分は人工物で、四分の一は宇宙人なんだ。まともなニンゲンなんて時期にいなくなるさ。

踊る女

新大阪で「さくら」から「のぞみ」へと乗り代える。狭くなったシートに肩を潜めながら通路側の席に落ち着くと、京都を過ぎるまでぼんやり過ごす。窓側の席にはまだ誰も居ない。となれば、テーブルを倒して缶ビールとつまみを広げるにはまだ早い。

案の定、京都では多くの乗客が乗り込み、大きなトランクを引きずった細身の女が俺の前に立ち止まった。俺は女と目を合わせると、立ち上がって通路へ避ける。女はその大きなトランクを窓際へ押し込むと、その隙間にコンパクトに収まった。

席についた女は、すぐにウォークマンを取り出してイヤホンに耳を差し込んだ。何やら蠢く気配を横目で何え、その指先がヒラヒラと踊っている。そして、ウォークマンの小さな液晶画面には、バレエの舞台のような映像が流れていた。

バレリーナさんかな？

俺は、気にせず続けてくれというメッセージを発信すべく、テーブルを倒して缶ビールと笹蒲鉾を並べた。すると、女の踊りは、指先だけに留まらず、手首や肘までもが回りはじめた。しばらく視界の隅にその優雅な手さばきを映しながらビールを啜っていたら、不意に踊りは止み、女はうなだれた。眠ってしまったようだ。

物足りなさを覚えた俺は、鞆からイヤホンを取り出して携帯端末にイヤホンをつなぐ。そして、沖縄のポップソングに鼓膜を振るわせた。

東京までまだ二時間。俺は笹蒲鉾を前歯で削りながら、チビチビと缶ビールを口に含む。炭酸は口の中ですぐに消えた。なんとも冴えない液体を笹蒲鉾の削り滓とともに流し込んでみると、次第に自分が惨めに思えてくる。

女の膝に目を落とせば、バレリーナの舞う小さなモニターと、それを乗せた白く細い手。そのしなやかな肉体を纏った女は、どんなに素敵な日々を送っているのだろうと想像する。日の当たるダイニングで、朝飯にはヨーグルトにディップしたセロリなんかを囓っているのだろう。背脂を散らしたラーメンなんて食べたことがないのだろう。コカ・コーラは嫌いでない。それは Original の赤い缶ではなく、ZERO でもなくて、何故か Diet ね。

俺はイメージで遊ぶ。苦笑いを浮かべながら、最後の笹蒲鉾を口の放り込み、缶を逆さにして最後の一滴を舌で受ける。すると、女は目を覚まし、再び踊りを始めた。俺は音楽を悠長なポップソングからガレージバンドの爆音に切り替える。少し酔った俺は懸命にアイデンティティを取り戻す。それでも爆音に紛れながら女の気配を感じている。隣で踊る女の気配。かすかな香水の香り。そして、俺は右手で左手首を掴んで前方に手のひらを突き出す。

シャルウィダンス？

否

キャナイダンスウィズユウ？

そのまま、両手を頭上に掲げて、軽く左右に倒しながら脇の下を伸ばした。ダンスというかストレッチね。

何号車に乗ってる？

不意に届く妻からのメール。そうだ。今日は彼女が息子と一緒に迎えに来ることになっていた。新幹線が大好きなあいつのために、早く帰れそうな日はホームで会うことにしている。息子の気が済むまで新幹線を眺めたら、会社から支給される出張時の夕食代を上限額まで使って、家族と外食して帰るのだ。そのために二時間半の乗車時間は、ビール一缶と笹蒲鉾一本だけにしておいたのではないかな。

手首から肘へ次第に大きくなる女の踊りを余所に、俺は自分が座っている車両番号をメールした。やがて、車内アナウンスが流れ、列車はホームへ滑り込んでいく。俺は立ち上がり、網棚に手を伸ばす。

「ちょっとごめんなさい」

最初で最後、俺は踊る女に声を掛けた。踊る女は小さく頷いて、肘から手首へ、手首

奥付

奥付

Puzzle 文集 6

著者：puzzle

著者プロフィール：

感想はこちらのコメントへ

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/70092>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<https://puboo.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ

{{-
-}}

Puzzle文集6

版番号の予定

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社